

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
日本の近現代史からまなぶ憲法

第1期「まなびと夜間塾」特別講座

2020年6月19日

講師：齋藤 健 衆議院議員
テーマ：「政治家のための戦前史
—奉天からノモンハンまで—」

皆さん、こんにちは。今日は本当に貴重な機会を頂戴しまして、ありがとうございます。特に中谷学院長におかれましては、こういう精力的に歴史を学ぶ、国会議員のためであり、政治を志す方々のために本当に素晴らしいことだと思っています。私自身、任に堪えるかどうかわかりませんが、実は、歴史から学ぶべきことをまだまだ学んでいないんじゃないかという思いが非常に強くありますので、今日はそのへんをお話しできたらと思っています。沢山お話ししたいことがあるので上手くまとまるかどうかわかりませんが、時間もありますので早速、入っていききたいと思います。

まず、私が何で歴史に興味を持つようになったかという、そのきっかけですけれども、これは1冊の本との出会いからなんですね。私がまだ、ご紹介ありましたように、当時の通商産業省の課長補佐の時に読んだ本で、本当に衝撃を受けました。大変有名な本なので、もう読まれた方もおられるかもしれませんが、野中郁次郎、当時の一橋（大学）の教授をはじめ共著ではあるのですけれども『失敗の本質』という本でありまして、どういう本かといいますと、第二次世界大戦の時に旧帝国陸海軍が行った意思決定、これを組織論とか意思決定の切り口で分析した本であります。

初めはノモンハン事件から始まり、ミッドウェー、ガダルカナル、インパール、沖縄と、それぞれの戦いにおいてどういう決断がなされたかということ、歴史学者ではなくて、経営学者が歴史学者と協力しながらケース・スタディとして取りまとめた本なんですね。たまたま手に取って、読んで衝撃を受けたのは、そこに書いてあります「旧帝国陸海軍」という言葉を「通商産業省」と置き替えて読んでみると、今でも同じ光景が繰り返されているんじゃないかということに衝撃を受けたわけであります。

つまり300万人の犠牲者というそれだけの高い授業料を払って我々は組織論とか意思決定という点において一体、何を学んだのだろうか、当時、若き通産官僚であります齋藤健さんが衝撃を受けたということなんですね。それ以降、私自身は、「なぜああいう戦争に突入していったのか」、そこから今の官吏の人間が何を汲み取って今後に活かしていかなくてはいけないかと、真面目に歴史の本をたくさん読むことによって自分なりに追求を始めたというのがきっかけなんですね。

この本を書かれた野中郁次郎先生には、直接伺ったお話なのですが、この作業をしながらずっと抱き続けていた疑問があったというんですね。どういう疑問か。実は真珠湾攻撃が「無通告のスニークアタック」であるとアメリカではよく言われているわけで、そこばかり強調されるのですが、海の戦いの歴史では画期的な出来事だったのです。

どう画期的だったのか。それまでは戦艦同士が大砲で撃ち合い、決着をつけて制海権を握るとというのが海の戦いの常識だったわけです。この常識が確立したのは古く1588年にスペインの無敵艦隊をフランシス・ドレイク率いる英国艦隊が完膚無きまでにやっつけ、スペインの時代から大英帝国の時代へと移っていくわけでありますが、その時まで海の戦いの歴史は、相手の船の横っ腹に船首を突き刺し抜けなくして乗り移って戦うという戦い方だったわけです。つまり陸戦を船の上でやるような……。

フランシス・ドレイクは、スペインの無敵艦隊と戦った時に「相手の船から離れろ。離れて大砲で決着をつけろ」と指示し、完膚無きまでにスペインの無敵艦隊をやっつけた。それ以来、日本海大海戦というのが日露戦争の時にありましたけれど、あれもいわば大きな船、大砲で沈めるという最も典型的なケースだったと思います。以来、パールハーバーまで350年間、海の戦いとはそういうものだったんですね。

ところが、日本が初めて「飛行機で船を沈める」ことを実戦でやったのがパールハーバーだったのです。そういう意味では、海の戦いの歴史の中では画期的な出来事だった。理論的にはいろいろありましたけれども、実戦で初めて大成功を収めたのが日本だったわけです。

野中先生の疑問は、日本が海の戦いの歴史が変わったということを証明したわけですが、その後アメリカは海の戦いの戦い方が変わったことを明確に認識し、空母を主体とする機動部隊で海の戦いに臨むようになった。要するに空母を量産するという構造改革をアメリカは物の見事に遂げるわけであります。

一方、日本は、自ら歴史を変えておきながら、相変わらず「戦艦大和」に頼り続けた。もちろん空母へ変えるとか努力をしたのですけれども、中途半端に終わっているわけです。改革していないとは言わないけれど、アメリカのように徹底されなかった。

自ら歴史を変えておきながら、なぜ最後まで「戦艦大和」に頼ったのかというのが野中さんの疑問であったわけです。その疑問をぶつける相手を野中さんは見いだすわけですね。全部、本人から聞いたんですね。それが源田実さんという方です。この方はパールハーバーの時に航空参謀で参画していました。当時37歳ですので、しっかりした分析能力もお持ちだったと思うのです。戦後、生きながらえまして、最終的には参議院議員までやります。その方が病いの床にあることを野中さんは聞きつけまして、長年のこの疑問を源田さんに病床まで行ってぶつけるわけです。「どうして日本は変えられなかったのか」と。

そのときの源田さんの答えが、「水兵の失業問題は見逃しができない大問題だった」。つ

まり、今まで月火水木金で、水兵と一緒に家族的紐帯の下でやってきて、「いや、これからは飛行機乗りの時代なんだよ。君たちはもういいんだ…」とそう言うことは出来ないのだというのが彼の言葉だった。つまり戦争という“生き死に”がかかった究極の極限状態においてもなお優先順位が付けられない日本の姿というものをそこに私は感じたわけです。

そこで「いや、昔のことですな」と笑えたかというとなんか笑えなかった。なぜなら英語教育1つとっても、これからは読み書きもさることながらスピーキング・ヒアリングが出来なければ、世界とのビジネスを前提としないと生き残れない日本ですから英語教育がもっと大きく変わって、喋れる人がどんどん増えていかなきゃいけないのに、依然としてろくに喋れない若者を大量生産している。なぜかというとなんか教えられる先生がいないということになってきて、結局、英語の先生の失業問題じゃないかということになってくるわけで、変わっていないということに非常に衝撃を受けたわけですね。

一方で、いろんな本を読みますと、「日露戦争の時」の日本は、もうちょっとまともだったよなど。あれだけのナポレオン率いるフランス陸軍に、ロシアの陸軍に日本は勝ったのですよ。いかなる要因があったにせよ。この時の日本というのはすごいじゃないか。

いろんな意見があるのですけれども、1つだけ例を挙げますと、最先端の技術をどんどん使う能力が当時の日本はすごく高くて、下瀬火薬という非常に優秀な火薬を開発したり、皆さん、なかなかご存じないのですが、無線電信。実は1896年にイタリアの（グリエルモ・）マルコーニが実験して、いよいよ無線電信ができるようになった。1896年のことです。それに目をつけた日本の軍人が、日露戦争の時には海と海の中の船同士の通信を全部無線で、そして陸まで無線通信し、陸からは有線で大本営まで一気に通信するというシステムを作り上げていたわけです。ロシアはとてでもないけどそこまでできていなかった。

そういう意味で言うと、最先端技術を120%活用する能力を持っていて、今で言えば5Gを世界で最も活用する国だった、そういうイメージだと思うのです。そういうことまでやっていて、第二次世界大戦、特に陸軍と海軍の連携が悪かったと言われるのですけれども、この時はもっと上手くいった。従って、日露戦争の時はもう少しまともだったのではないかと。

日露戦争の時にはよかった旧帝国陸海軍が、なぜ第二次世界大戦の時はこんなに変わってしまったのだろうか。私の疑問、問題意識は、その1点なんです。第二次世界大戦に

関する本を読むと、「いやー、これはひどいな。ひどかったな」というのが山ほどあります。日露の時を読むと「よくやったよな」という本は沢山ある。けれども、「よかったのがなぜダメになったか」というその点について分析した本は驚くほど少なかった。

私はそこが最大の関心だった。しかも、この時代は、皆さんご案内のように、右は国家改造思想から左は共産主義思想まで、日本人自身が改革に燃えた時代だったのです。改革に燃えていながら、ひどい結果になった。これは何なんだろう？それが私の問題意識。つまり「日露戦争から第二次世界大戦までの間」に一体、日本の何が変わったのかという点に絞って読み漁ったのです。

そして見えてきたものがあった。それを象徴的に言うために今日の副題ですけれども、奉天会戦は1905年に当時のロシアと日本が戦った1つのバトルです。ノモンハン事件は1939年にソ連と日本が戦ったバトルなんですね。同じ相手に、日本は変わってしまったという話なので、象徴的に奉天とノモンハンを対比しているわけですが、奉天は1905年、ノモンハンは1939年。日本が大きく変質するのにわずか34年しか経っていないのです。このわずか34年の間に何が起こったかという点に絞って自分でやって浮かび上がってきたことが4つありました。

1つは、「指導者層の変質」というのがこの間に起こるのです。最初に項目だけ挙げます。2つ目が、「日本の組織は自己改革が出来なかった」。3つ目は、「戦史をきちんと残していなかった」。4つ目は、「道徳といいますか、倫理というものが劣化した」。この4点がこの34年間に起こったことというので私が抽出をしたわけであります。

皆さんに、ひとつ歴史的証言みたいなものを申し上げます。1つ目の指導者層の変質が恐らく政治を志す人には大きいテーマだと思うので申し上げますと、松井石根（いわね）という陸軍大将がいました。この人は実は日露戦争にも参画しておりましたし、第二次世界大戦でも参画し、両方を経験した陸軍大将であります。結果的に南京虐殺の罪を問われ、A級戦犯として巣鴨プリズンの絞首台の露と消えるわけであります。この人が絞首台に上る前、教誨師といって心を落ち着けるために宗教者が面接をして——というのが死刑の前にあったわけであります。その時に松井石根さんが最期に遺した言葉というのが残っております。それをちょっとだけ読み上げたいと思います。

「私は日露戦争のとき、大尉として従軍したが、その当時の師団長と、今度の師団長などと比べてみると、問題にならんほど悪いですね。日露戦争のときは、ロシア人に対してはもちろんだが、中国人に対しても、俘虜の取り扱い、その他よくいっていた。今度はそう

はいかなかった。武士道とか人道とかいう点では、当時とは全く変わっておった。

自分が虐殺を叱ると、あとで、みなが笑った。ある師団長のごときは、当たり前ですよ、とさえいった。国が変わって、若い者は血気にはやって、とうとう、こんなことになった。」

私は、このセリフの中の「国が変わって」という言葉に非常に引っかかった。つまり、わずか34年の間に、松井大将の目から見て「国が変わった」という言葉になるほど変質を遂げていたということが、この間に起こったのではないか。

もう1つの例を挙げますと、有名なダグラス・マッカーサーです。ダグラス・マッカーサーのお父さんも軍人でありまして、日露戦争の観戦武官だったのです。ダグラス・マッカーサーは当時まだ20代だったと思いますが、日露戦争後、お父さんに連れられて日本へ来ているんですね。そして当時、日露戦争のヒーローである大山巖とか乃木希典とか、そういう人とマッカーサーは当時、会っているのです。

そして戦後、日本と戦うことになって、これは運命的なものでしょうね、日本に進駐し、久しぶりに日本の軍人と——軍人だった人かもしれませんが、会うことになって、マッカーサーはこういう言葉を残しているんですね。

「別の国の軍人のようだ。」

つまり、この34年間に大きな変質が起こっていることはどうやら間違いなさそうだと思います。そのときに言えることは、この間に起こったことという指導者層の変質は一体何が起こったかということです。

実は、日露戦争の時に司令官とか総司令官の地位にあった人たちは、「武士の末裔」なんですね。若い頃、武士としての教育を受け、そして戊辰から始まって西南戦争、日清戦争と鍛え抜かれた人たちが最後、司令官・総司令官のところにはいたわけです。

一方で、実際に作戦を立案する参謀レベル、40代ですが、明治になって近代軍事教育を早急に身につけなければ日本はやられてしまうという切実した環境の下で、西欧の軍事技術を徹底的に速成で学ばせた人たちです。有名な「秋山兄弟」とかそういうレベルの人たち。この人たちは軍人じゃないのです。つまり日露戦争の時は、武士の末裔だった指導者と、その下に、近代軍事教育を身につけたテクノクラート、これがベストコンビネーションを組んでいたんですね。

武士というのは何か。武士と軍人、同じではないかと思うかもしれませんが、大いに違っています。今の言い方で言うと財政政策も武士の所管でありまして、農業政策も武士の所管であり、外交政策も武士の所管であります。つまり武士とは単なる戦う人ではなく、

ジェネラリストの統治者なんですね。そのジェネラリストの統治者が最後、指揮を執り、彼らに欠けている近代軍事教育を受けた人たちが参謀として支えるという、つまり世代としてはベストのコンビネーションを組んだのが日露戦争の時で、その後の歴史は、武士の末裔の人たちが歴史の舞台から去っていき、中堅幕僚、青年将校と言われる人たち、つまりジェネラリストではない、プロフェッショナルな人たちが台頭してくる歴史になってきたわけです。そこで大局観というものが失われていった可能性があるのではないかと。

武士はどういう教育を受けていたのかということ、ちょっと見てみます。福沢諭吉、この人は中津藩の下級武士で生まれるわけです。33歳で明治維新を迎えています。彼は自分が受けた教育について『福翁自伝』で語っているのですが、こういうことを書いています。

「論語、孟子、蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、荘子の講義を聞き、また独学で史記、前後漢書、晋書、五代史、元明史略という歴史を読み漁る。中でも左伝全30巻は11回読み返し、面白いところを暗記していた。」

【左伝通読十一偏……論語、孟子は勿論、すべて経義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩経に書経と云うものは本当に講義をして貰って善く読みました。ソレカラ蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、荘子と云うようなものも能く講義を聞き、その先きは私独りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書、晋書、五代史、元明史略と云うようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五巻の内三、四巻で仕舞うのを、私は全部通読、凡そ十一度び読返して、面白い処は暗記して居た。】

つまり、武士の子供たちが受けた教育は、中国の治乱興亡の歴史であり、中国の哲学。これを物心つく頃から、暗記するぐらいまでたたき込まれた。そういう教育を受ける中で、指導者とはどうあらねばならないかということを知らず知らずに身につけていた人たちが最後、指揮を取ったのが日露戦争だった。逆に言うと、日露の後、時代、世代が大きく変質していったということだと思っんですね。

政治の話に戻しますと、武士の末裔がいなくなった後、ほんの少しだけ武士の根っこを持った政治家が大正時代に現れてきます。それが原敬です。原敬という人を私は大変尊敬していて、彼に関する本は何冊読んだかわからないぐらいです。僕らが歴史で習うと、初めて政党内閣を率いた平民宰相、そんなイメージしかないのですが、この人はとんでもないジェネラリストでした。

まず、賊軍・南部藩出身ですよ。にもかかわらず政友会の総裁になっているのです。政友会は初代総裁が伊藤博文、これは明治の元勳中の元勳。2代目の総裁が西園寺公望で、公家のプリンス中のプリンス。その後に賊軍・南部藩出身の平民が就いているんですよ。

それで最終的に総理にまでなる。政治家としては、とんでもない力量があったと推察されるわけです。

ところが、この原敬は官僚時代もあるわけです。15年間、官に使えている。陸奥宗光の下で外務省にもいましたし、農商務省にもいたわけでありますが、29歳の時には天津の領事をやっていました。当時、天津にいた李鴻章という中国を代表する大外交家と29歳の原敬が天津領事として丁々発止やり合っていたし、フランスの公使として3年間いたこともあり、山縣有朋がパリに来た時には、なんと通訳をしている。フランス語がペラペラなんですね。官の世界に15年いた。

民の世界はどうかといいますと、北浜銀行の総裁を3年間かな、銀行のトップをやっているんです。それから古河鋳業という大財閥の副社長もやっていました。当時の社長は陸奥宗光の次男ですが病気がちだったので、ほとんど社長業務もやっていたということなので、民の世界でも上り詰めている男なんですね。

じゃマスコミはどうだったかといいますと実は、最初、彼が若い頃は記者をやっていました。郵便報知新聞というところの記者をやり、大東日報では論説を書く仕事をしていまして、最終的には大阪毎日新聞という大新聞の社長を3年やっています。当時、難しい言葉で書いていた新聞を平易な言葉で書き直すとか、文芸欄・家庭欄をつくるとか、画期的なことをやって売上を3倍ぐらいに伸ばしたということもやっていますね。

政治の世界で上り詰め、官の世界では最終的に今で言う事務次官までやっていますので、官の世界で上り詰め、民の世界で上り詰め、マスコミの世界で上り詰め、最後、残っているのは司法ですな、ということですけど、実は彼が最初に志したのは、司法省法学校に入っていて、司法の道です。学校で彼自身の責任ではないのですがトラブルに巻き込まれ退学処分になるということで、司法の道はそこで終わっているのですが、そのくらい幅の広いジェネラリストだったわけです。

原敬の政敵でありました大隈重信という人も、ちょっと振り返ってみると、とんでもない男でありまして、彼は佐賀藩（鍋島藩）の上級士族の息子として生まれます。彼の家は築城と砲術を専門としていた。つまり彼は技術者として人生をスタートさせます。ああいう時代ですから、これからは海外のことを学ばなくちゃいけないということで、蘭学を勉強し、(グイド・)フルベッキのもとで法学を勉強する。フルベッキに言わせれば、大隈は「新約聖書」とアメリカ憲法をマスターしてしまったというぐらい英学を勉強するわけです。そして幕末の動乱で、藩の軍政改革とか財政改革に若き藩官僚として取り組むわけで

すが、気に入らないことがあって脱藩して、明治維新を迎えて、大久保に認められ、今で言うところの財務事務次官・外務事務次官、そういうものを務めるわけですね。そこで外交もやって、当時、うるさ型のイギリスの公使（ハリー・）パークスに「大隈の外交力はすごい」と言わしめるぐらい外交能力もあった。

官の世界で上手くいかなくなって飛び出して政の世界、つまり立憲改進黨という政党を自らつくり、政治の世界でもまた活躍し、さらに今後は若い者を教育しなくちゃいけないということで東京専門学校、早稲田大学をつくる。彼を見ていると技術者であり、官僚であり、政治家であり、教育者であり、そういう人が何とか率いていた時代から、中堅幕僚、青年将校が台頭してくる時代に少しずつ変わっていった。

非常に面白いことに、最後の武士の末裔とぎりぎり言える大隈とか原敬という人たちが亡くなった年なのですが、原敬が亡くなったのは1921年11月4日で、私の車のナンバーが114です。それはどうでもいいけど、大隈重信が死んだのは1922年。この1921年とか1922年は、なんと奉天会戦とノモンハン事件の中間時点です。ちょうど中間時点でそういう人たちが消え去っていった。そして次の世代が背負っていくことになったということで、この時代の変化の1つは、そういうジェネラリストの人たちが指導層から消えたということだった。

もう1つは、組織が自己改革できなかったということでありまして、例を挙げるときりはないのです——時間もあれなので、私の本に山ほど例は書いてありますが——1人の言葉だけ紹介します。それは黒島亀人という、ミッドウェー海戦時の前任参謀のポジションにあった人です。前任参謀というのは日露戦争の時であれば秋山真之のポストです。この人が戦後こういう言葉を残しているのです。ある本で拾ってびっくりしたのだけれども、ミッドウェーの負け戦について、

「本来ならば、関係者を集めて研究会をやるべきだったが、これを行わなかったのは、突付けば穴だらけであるし、みな十分反省していることでもあり、その非を十分認めているので、いまさら突っついて屍に鞭打つ必要がないと考えたからだった、と記憶する。」

（吉田俊雄『海軍参謀』）

つまり、なぜ敗れたかという分析・検証、していないんですね。これは驚きで、なぜ、しないかという、まあまあ、角が立つじゃないか、ということなのでしょう。

そういう意味で言うと、源田実さんの言葉に通じるわけです。要するに時間が経つにつれて組織の自己改革力というのがどんどん落ちていくんですね。そういうのがこの2つの

戦争の間に起こっているということでもあります。

では、どうすればいいのか、ということがないと意味はないわけではありますが、私は、じゃ野中さんがどういうふうにお考えになっているか、野中さんと呼んで話を聞こうと、課長補佐時代です、もう30年も前になるのですが、野中さんをお願いした。野中さんが旧帝国陸海軍の意思決定の仕方を分析されて、今の官僚組織にいる若者に、つまり軍組織は究極の官僚組織ですから、その官僚組織が犯した過ちをいっぱい見てきた野中さんが、今の若き官僚にメッセージ・教訓として何を伝えるか、その点に絞ってお話してくれませんか、私がお願いし、課長補佐を何人か集めて野中さんに話をしてもらったことがあるのです。

野中さんの話は衝撃で、私は一生忘れないですが、野中さんはこう言いましたね。

「何が物事の本質か、それを追求する個人、そしてそれを許容する組織・風土、それを維持し続けることに尽きる。あとは応用問題だ。」

日本の組織が出来た当初は非常にアクティブでありました。新しいアイデアもどんどん実現するし、人事の抜擢などが行なわれる。だけど30年もたつと、誰々が言っているから、過去こうだったから、ということで重要な決断が行われるようになる。そのときに、それは本質じゃないんじゃないか、本質はこうじゃないか、と言える個人、そしてそれを許容する組織・風土、それを維持し続けることに尽きる。その1点だけでありましたね。

これは我々にとって非常に重い話で、往々にして、あの人が言っているんだから、幹事長が言っているんだからと、そうなりがちですけど、そこを自分の頭で検証することですね。本当にそうなのか？ それはおかしいと思ったら堂々と発言する。そしてそれを許す。そういう組織・風土、これを維持し続けるということなのだと思うんですね。

これは簡単なようで出来ない。

日本で一番嫌われる人は「和」を乱すやつです。「和」を乱すやつが一番嫌われる。「和」を乱すやつは何を言っても、「和」を乱すという一点で聞いてもらえない。そういう風土がある。いいこと言っても「和」を乱すやつは嫌われる。これをぶち破らない限り、我々は同じ過ちを繰り返す。というのが日本民族の持っている最大の弱点。

そういう趣旨なのだろうと、私自身は解釈しているので、これから政治に携わる人たちには、何が本質なのかということ常を常にあらゆる政策において頭に入れてやっていくことが、300万人の犠牲を払って得た、我々の大事な教訓なのではないかということに思い至っているということですね。

最後、今日は一応、憲法というのがあるので2つだけ雑談で、あと5分ぐらいで憲法のこととも言わなくちゃいけないので、昔の憲法のことを言います。「律令（りつりょう）」ってありました。律令は昔の平安時代——明治維新まで存在しているのですが、「律」は刑罰、「令」は政府の組織を決めている当時の憲法みたいなものです。政府の組織は太政官とか大蔵省とか、そういうふうに決まっているわけですね。時代が経つに連れて新しい組織が必要になってくる。実際には関白とか摂政とか、治安組織である検非違使（けびいし）とか、そういうものが新たに必要になってきます。そういうものは律令の中でどう扱われるか。律令を改正せずに「**令外官**（りょうげのかん）」と言って、律令の外に組織（官職）がどんどん出来てしまう。つまり、何で改正しないのか？ 改正するといろいろゴタゴタする。でも必要だよ、ということで、皆さん「令外官」ってもしかしたら覚えておられるかもしれませんが、律令という組織を変えずに、外へどんどん組織（官職）が増える。

実は、征夷大將軍は令外官なんです。征夷大將軍は、ご案内のように軍事のトップ、軍のことですね。それが律令に位置づけられていなくて、令外官なのです。

山本七平さんという日本の文明を鋭く見つめた方がおられますけれども、山本七平さんがすごい一言を言っていて、

「自衛隊は、現代の令外官だ。」

つまり律令時代から日本は変わっていない。そういうことを山本七平さんは言いたかったのではないかと思うのですが、それほど、変えるということに対する抵抗がある、でも必要だという、それが日本だと思います。

もう1つ面白いのは、憲法に関して言うと「十七条憲法」、そこまで遡るのです。これも現在につながるのですが、第一条は「和を以て貴しと為し、」——これは有名です。第二条は「篤く三寶を敬え。」なので仏教。第三条が「天皇の命の詔を聞きなさい（詔は必ず謹んで承れ）」。一条が和、二条が仏教、三条が天皇ということ。憲法にとって一番大事なことを第1条に書く。それは常識だと思うのです。つまり当時の日本にとって、仏教よりも天皇よりも「和」が大事な概念だったということを十七条憲法は言っているわけですね。

当時の時代を考えますと、これからは仏教によって国を守っていく、鎮護国家として、仏教を国教とまでして、とにかく仏教の力で平和を守る、維持していくのだという時代にもかかわらず、仏教よりも「和」が上だし、これからは天皇中心の中央集権国家をつくっていいかなくちゃいけない。天皇よりも「和」のほうが重要だということが十七条憲法に書いてあるんですね。サラッと読み飛ばしちゃいけなくて、そういう構造になっていると

思います。

最後の十七条に何と書いてあるか。「物事は話し合いで決めなさい」と書いてある。これも「和」ですよ。

それほど「和」が重要とされているのですが、この十七条憲法で、私は個人的に気づいたのだけれど、最後の十七条の「話し合いで決めなさい」というのと、三条の「天皇の言うことを聞きなさい」というのは、もしこの2つの判断が違っていたらどうなんだろう？つまり調整規定がないわけです。天皇の言うことに従って話し合いで決めなさいと書いていない。仏教の教えに従って話し合いで決めなさいと書いていない。「話し合いで決めなさい」としか十七条には書いていない。

ということは、三条の「天皇の言うことを聞け」ということと、十七条とは矛盾する可能性がある。本当はその調整規定が入っていないと憲法としておかしいのだけれども入っていない。この矛盾を矛盾としないために答えは1つしかない。「話し合いで決めたことしか天皇は言わなければいい」のです。つまりこれが今の憲法につながる発想なんじゃないかなと思っています。

いずれにしても、今日は奉天からノモンハンに焦点を当てましたが、実は、奈良、平安時代まで遡って考えると、もっとよく日本人の特質が見えてくるし、我々が何に気をつけなくちゃいけないかということも見えてくるんですね。ここから先、奈良までいきますとあと45分ぐらいかかるので、ここでやめておきます。

繰り返しますけれど、『失敗の本質』の本でも繰り返し言われていることですが、いろいろな人の意見を聞くことによって戦略目的が曖昧になる。これが失敗の本質で、我々が受け止めなくちゃいけないことなんですね。つまり、大した経験もしていなくて、ろくな意見も言っていないんだけど、この人、少し配慮しなくちゃいけないとかそういうことが重なってくると戦略目的が曖昧になり、ミッドウェーやパールハーバーの時のような最後まで戦略目的をクリアにして完結するということが出来なくなってくる。

最後に私が言いたいのは、「和よりも大事なことがあるんだぜ」ということです。

以上です。ありがとうございました。

(この回おわり)